

キラキラ輝いてます！

―東日本大震災復興支援ボランティア編― 居ても立ってもいられず被災地へ…

平野 博さん 中央在住

被災地で何かしたい

「阪神淡路大震災のときは、被災地に行きたくても行けず悔しい思いをしました。東日本大震災では、東北地方に親戚がある訳ではないのですが、あの映像を見たら居ても立ってもいられず、行くのがあたりまえかなという思いで被災地に向かいました」そう語る平野さん。

平野さんは、長年勤務していた消防署を3月末で退職した。折り返し退職前に大震災が発生したため、4月5日には宮城県石巻市に入ってボ

ランティア活動を開始した。石巻市には、4月に約1か月、5月に2週間、6月に1週間滞在した。5月は3日間女川町に行き、9月には気仙沼市に1週間滞在した。被災地では、車中泊で自炊生活を送った。

ボランティアリーダーとして

平野さんは、被災地で経験を積むことで、ボランティアリーダーとしても活躍した。「主な活動は、ヘド口の掻出しと家具の搬出、瓦礫の撤去です。ヘド口のなかには、ガラス片などが含まれていたので、注意して取り除くよう指示しました。また、仲間に苦しいことはさせずに、笑顔で作業できるように気を配り、もう少しと思うところで休憩を入れまし

どの物資を置いていってくれたそう
だ。まさに、平野さんの人柄が滲む
エピソードだといえる。

地元の人とのふれあい

「ある被災地では、3日間の予定で、おばあさんと息子夫婦の家を清掃しました。初日は『皆さんよろしくお願いします』だけで、ほとんど会話はありませんでした。2日目に家の中が片付いてきたので、おばあさんの表情が柔らかくなりました。3日目になり、作業がほとんど完了すると、おばあさんが涙を流しながら『こんなに綺麗にしてもらって申し訳ありません』と言ってくれました。この一言は忘れられない思い出になっていきます」そう語る平野さん。

この様な家は他に何軒もあつたそう
だ。また、女川町に2日間の日程で
入つた際、『あと1日残ってくれま
せんか』と女性ボランティアに懇願
され、3日目に太鼓の清掃を行った
そう。その際に、川崎市で製造さ
れた太鼓があつたことや津波に流
されて、1本の細い蔓につかまって
いて助かつたという地元の話な
ど、ボランティア活動中の様ざまな
できごとを話してくれた。

日ごとの備えが大切

平野さんは、東北地方には、津波
が起きたらたんでバラバラに逃げろ



④ / 石巻市で知り合い4月25日から行動を共にしたスガノ農機株式会社の社員5人とボランティアの皆さん。(前列左から3人目が平野さん)

という意味の『津波でんでんこ』という言葉が伝えられていて、そのとおりに行動して家族全員が助かった話をしてくれた。また、毛呂山町は比較的災害の少ない地域だと言われているが、過去に崖崩れが発生したこともあることを例にあげ、「日ごろから災害が発生したときにどう行動し、どこに避難するかなどを具体的に決めておくべきだ」と語った。「ボランティア活動は、震災後にあるサッカー選手が呼びかけた『一人ひとりができる事をやりましょう。日本が一つのチームなんです』の言葉を胸に、家族の協力を得ながらこれからも継続していくつもりです。娘の先輩が、宮城県気仙沼市に住んでいて、『今度、いつ来てくれるの?』と言われています。できるだけ早く時間を取り、現地に行こうと思っています」と平野さんは力強く話してくれた。



① / 日和山公園から見た石巻市内 ② / 9月の気仙沼市内 ③ / 太鼓の清掃 (女川町)